



一般社団法人 アクト・ビヨンド・トラスト 2019 年度助成企画募集のご案内

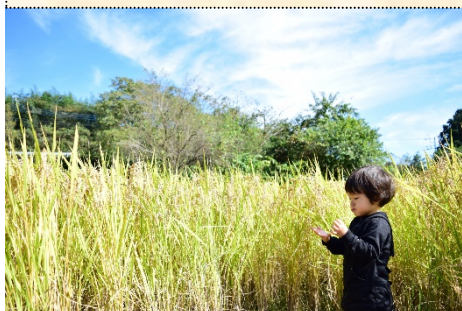
～ ネオニコチノイド系農薬に関する企画 ～

一般にはまだあまり知られないまま、お米から果物まで、ときには「減農薬」の切り札として用いられ、シロアリ駆除剤や防虫剤として身近な暮らしにも入り込んでいる浸透性殺虫剤(ネオニコチノイドおよびフィプロニル)——。近年の急速な研究の進展により、環境動態、非標的種無脊椎動物や脊椎動物における毒性メカニズムなどが明らかになりつつあります。世界の科学者コミュニティからは、生態系と生物多様性全体を脅かすことへの警鐘が鳴らされているだけでなく、ヒトへの毒性を懸念する声も挙がっています。

本助成は、予防原則を踏まえて、製薬メーカーの意向や現行の行政判断に左右されない独立の立場から浸透性殺虫剤の影響を検証する調査・研究を支援します。浸透性殺虫剤の被害を防ぐ、規制のあり方や一般市民の消費行動を変える働きかけに活かされるといった方向で、これからの社会が浸透性殺虫剤に向かい合うための公共的な議論の土台となる成果を期待しています。ふるってご応募ください！(応募要項など申請書類一式は下記リンクよりどうぞ)

<http://www.actbeyondtrust.org/program/kobo2019/>

1. 応募資格：ネオニコチノイド系農薬(およびフィプロニル)に関する問題提起や、使用の削減ないし中止に取り組む個人および団体(ボランティアグループ、NPO/NGO、公益法人、研究機関、生産者など。地域、法人格、活動実績は不問)
2. 助成金額：1 企画あたりの助成額上限 100 万円
公募助成 4 カテゴリー(「調査・研究」「広報・社会訴求」「市場“緑化”」「政策提言」)のうち、今年度も昨年に続いて「調査・研究」に絞ります。
3. 参考重要テーマ(これらの主題に限定しませんが重視します)：
 - ◎ 哺乳類とヒトへの影響(とりわけ子どもに対する発達神経毒性)
 - ◎ 水田生態系や水系への環境影響
 - ◎ 浸透性殺虫剤に依存しない生活圏の創出
4. 助成対象期間：2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日の間に実施される活動
5. 応募受付期間：2018 年 12 月 7 日(金)～2019 年 2 月 1 日(金)
6. 問い合わせ先：一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト 助成係
電話：070-6551-9266(平日 10:00～19:00)
Email: grant@actbeyondtrust.org
<http://www.actbeyondtrust.org>
<https://www.facebook.com/actbeyondtrust>
(12/28～1/6 は年末年始休業)



一般社団法人アクト・ビヨンド・トラストは、自然環境と人間生活の調和を目的とした市民や NPO・NGO の活動を支援する、独立した民間基金です。問題解決のための具体的・効果的・創造的なアクションを重視し、資金援助、コンサルティング、技術および人材提供、トレーニングなどを行なっています。詳しくは上記ホームページや Facebook をご覧ください。

これまでの企画から

2018年に採択された[公募企画例](#)をご紹介します。

これまでに実施された企画は、アクト・ビヨンド・トラスト web サイトの「助成プログラム」(公募助成)をご参照ください。2017年度までの各助成対象企画について報告書をご覧いただけるほか、同サイトの「助成先活動情報」では、2018年度助成対象企画の活動状況をリアルタイムで取り上げています。

<http://www.actbeyondtrust.org>



学術誌の査読をクリアできる確実な調査・研究を求めますが、学界への寄与にとどまらず、地域コミュニティへの啓発や、市民活動の根拠となるエビデンスとして広く活用されうる、中立で開かれた姿勢を歓迎します。

■ ネオニコチノイド系殺虫剤の母子間移行メカニズムの解明

当該研究では、ネオニコチノイドの母子間移行メカニズムの解明を目的に、霊長類モデルとしての妊娠ニホンザル保存試料を用いたネオニコチノイドの母体-胎児間移行メカニズムの解明を実施する。当該研究によりネオニコチノイドの胎盤を介した母子間移行メカニズムを世界に先駆け明らかにすることが可能となる。得られた結果は、最も大切な神経発達期である胎児期・新生児期における毒性影響の一端の解明に通じる。

■ 市販国産鶏卵のネオニコチノイド系農薬残留分析

国産鶏卵について、フィプロニルおよびネオニコチノイド系農薬を含む131成分の残留農薬調査を行い、その実態の把握に取り組む。得られたデータは、ウェブページ、学会発表、希望する団体などに提供し、安全で安心な国産鶏卵の生産、消費への取り組みへ繋げていきたい。

■ 一年を通じたミツバチのネオニコチノイド暴露経路解析

本研究室の2017年調査から、国内の多くの養蜂家の蜂コロニーはネオニコチノイドに暴露されている可能性が示唆された。そこで、周辺自然環境が比較的単純な養蜂場にて、養蜂場の成虫、採取してきた花粉、蜜、蜂蜜中のネオニコチノイド濃度の経月変化を調査するとともに、養蜂場周辺のGIS地理情報や採取された花粉組成、周辺の使用農薬種とその利用特性も解析し、ミツバチの暴露経路の把握を行う。また、暴露経路を基にした暴露量削減対策を養蜂家や市民に提案する。

■ ネオニコチノイドと暮らす:京都におけるネオニコチノイドを含有する家庭用品の使用状況、消費者動向・意識の探求

ネオニコチノイド系農薬に関する問題の認識は高まりつつあるが、産業用ではない家庭用製品の利用実態については未解明の部分も多い。本研究では、オンラインアンケート調査やインタビュー調査を通じて、家庭レベルでの消費者の使用状況や認識を把握する。得られた結果を養蜂家や蜜源の分布、市民活動などの関連情報と統合して、ミツバチに優しい地域(Bee-friendly zones)の特定に取り組む。研究結果は論文等を通じて公表するほか、編集可能な地図としても共有し、市民や政策立案者の支援ツールとすることを旨とする。

■ 有機農産物摂取による尿中のネオニコチノイド量低減に関する調査研究

本調査研究では、1)日頃、無農薬の農産物を食べているグループと農薬散布された農産物を食べているグループの尿中ネオニコチノイド系農薬を比較調査する。2)農薬散布された農産物を食べているグループに当会から有機農産物と加工品・飲料などを提供して5日間摂取してもらい、その前後における尿中ネオニコチノイド系農薬を比較調査する。本調査結果を元に平易なチラシを作成配布して、農薬曝露低減のための無農薬の有機農業の重要性を一般市民に訴求する。

■ 哺乳類末梢・中枢神経系におけるイミダクロプリドの神経毒性発現メカニズムの薬理的解明

2016年度の助成により、哺乳類の副腎髄質細胞における低濃度のイミダクロプリド(IMI)のアドレナリン産生亢進作用を細胞培養系で発見した。また、海馬と中脳神経培養系各々で、低濃度IMIによる記憶やドパミン産生と関連する転写活性への影響を認めた。本研究では、IMIの神経毒性の更なる科学的証拠を得るため、生体(マウス)で副腎アドレナリン量や遺伝子発現へのIMIの影響を精査し、また培養脳神経細胞を低濃度のIMIに晒し、転写活性、神経機能への影響とその機序の解明を目指す。